

昭和 30 年代、我が家の紙すきの実態を子供心に、19 歳当時の日記に記したものを中心にまとめました。

このころは、内山でも数多くの紙すき農家があったと思います。

我が家では、田畑も少なく、内山紙の収入が家計の中心でありました。今思えば、寒の最中ながら、良くこんなに働いたもんだ、働かねば食えない時代だったのだなあと思います。当時は何の抵抗もなく、親に言われるまま。勉強は学校ですればたくさん、家に帰ったら、家の仕事を手伝わなくちゃいけないと良く言われました。手伝って親に誉めてもらうのが楽しみなくらいでした。

1 月の

3 日には、もう紙を煮る大釜の点検・修理・取り付け

8 日には、紙煮の準備

9 日には、第 1 回の紙煮

10 日には、節拾いの準備を始め

11 日には、節拾いを始めました

12 日 紙すく部屋の整理整頓

14 日から本格的に紙すきを開始

17 日 半日だけ、4 時間、紙すき

18 日 8 時間 等々と紙を漉くわけですが

すく準備の作業工程も次から次と並行して行います。

しかわ取り、紙煮、筋拾い、ニレむき、紙ほし等、以下 19 歳当時の日記をもとに、工程別にまとめて記します。

楮運び 楮はぎ

自家の楮切りは昭和 32 年には 11 月 22 日に始まり、26 日まで。27 日は内山の部落内、28 日馬曲の一部、30 日北鴨方面、12 月 2 日馬曲方面、4 日平沢、馬曲の残り。

各方面から買い集めて、12 月 3 日より、かずこなし（枝を払い）。短いものをまとめて目楮（めこず）束とする。5 日、6 日とかずこなし、枝はえり、12 日に終わり。

次は釜の深さに合せて一定の長さに押しガマで切り、大玉にする。

13 日より大玉作り。15 日には大玉作り終らし全部で 27 玉。

大玉は、玄関の入口で作り、大人 1 人で抱きつかれない程の大きさで、ワイヤーでまわりをはたきながら、カズをなじませて、硬く締めて縄で両端をしっかりとしばり、細木を二本並べたレールの上をころがして、庭の畑に積む、かなり重いものを二段にも、場合によっては三段にも積んだのを見た記憶があります。この頃はどこの家の庭先にも見られる光景でした。

12 月 15 日カズ玉作り終わり。子供の頃の記憶としては、外は真暗な中、かすかな電灯をたよりに、大玉をころころ転がして積むのも夜遅くまで続いた。

16 日には、かずはえの準備。台所の土間にどうのげ（ヤガヤに似ているが、ヤガヤより柔らかい）をかなり厚く敷いて、その上にねこ（藁であんだもの）を敷き、台所中がすべぶとんの様にガサガサして、そこで、とんだりねたり遊んだもので、一年に一度の年中行事として、楽しんだ思い出があります。

夕方からは、かや（雑木を枝ごと結束したもの）をどンドン燃やしてふかし始め、次の日まで止釜にして、17 日の朝は、早くから寒いところですが、頼んだ人たちが次々と集り、2 時半には 4 人集り、いよいよ作業開始。

かずの上にかぶせておいた桶を取り、カズ玉を上げると、釜からの湯気で、一気に台所中が暖かくなります。カズも熱く、手袋等で熱さをこらえて一本一本、こうずの皮をはぎます。次から次と、カズをふかしてははぎ、初日には 10 玉終わったのが夜 10 時 10 分。一日の労働時間、19 時間 40 分。

18 日には 2 日目、3 時～夜 7 時 30 分。4 人頼み、9 玉、16 時間 30 分

19 日には 3 日目、3 時～夜 7 時 30 分。4 人頼み、8 玉、16 時間 30 分

三日連続でやっと終る。かずはえの間は、2 日目、3 日目と疲労がたまり、火だけは続けて燃やしているの、寒くはないが一日が終わり、頼んでいる人が帰ると、気がゆるみ、茶の間の大きいいろりは、おぎ（火をもやした燃えがら）が山盛り。つついうたたね。かずはぎが終ると本当に家中皆で楽々します。しばらくはいつもの生活に戻るまでゆっくりします。

しかわ取り（黒皮除去）と 雪さらし

昭和 32 年は、1 月 11 日から始めて、2 月 26 日にぜんぶで 151 連終る。

楮の皮を小束に結束して、1 連 15 束のものを皮をはいだ後の棒につるして、水の中に浸しておいて、夕方水のしたたるままハゼにかけて凍らせて、皮の表面がしみてガリガリしているところを「おかき」（木の柄のついた金物）を右手に持ち、左手で皮を引っ張って、隅からすみまで、うすい黒皮をはぎ取り、楮の皮だけにする作業。夕食後、もっとゆっくりこたつにあたっていたいところでも、さあわえら、しかわ取り頼むぞ、早くやって早くしまおうと母親に言われて、いやいやながら冷んやりとした台所へ。

土間に敷いたちょっとした敷物の上で、身ぶるいがするような寒さ。特に寒いときは、杉葉を燃やしてあたるがつかの間の気休め。手を動かしていると冷たさで段々手がバカになって、それを通りこしてほてってくればしめたもの。体があたたまってくれば気分も爽快になります。

我が家では大体 3 人で 2 時間ぐらいの夜なべ仕事。

次の朝、しかわを取ったものを水の中に入れてよさぶって（ゆすって）、ごみを洗い落として、雪が降っても降らなくても雪の上に広げます。庭中田畑に目印を立てて並列を作ってさらし、適度に雪が降ってくれば良いですが、雪がどっさり積もったときは、棒の先にカギのついたので一束ずつ掘り出さねばなりません。

好天の時は、カズの上に雪をかけ、日中その雪がとけて白くなります。

日曜日の日中、スキーに行きたくともカズの上に雪をかけ、消えたらまたかけねばなりません。白くなったら、集めて、次の工程です。

紙煮

大きな釜で時間をかけて、ぐつぐつ煮込みます。煮れば柔らかくなり、量もかなり少なくなります。

昭和 33 年は、1 月 2 日に紙煮準備をして、1 月 3 日第 1 回紙煮。朝 6 時～9 時 30 分煮立ち、楮上げてアク出すまで 4 時間 30 分大釜でカヤ（秋にナタ鎌で切る程度の、あまり太いものではない雑木を結束して二階に保管）は細いぼやでよく乾燥しているの、二階から落とすとほこりにもなり、燃やすと良くもえ、火力も強いが、何せひどい煙も出ます。火をつくろうにほこりまみれ。煙は台所の天井をはい、茶の間から、勝手、座敷まで、煙ですすけます。これを 1 年に 16 回も繰り返すのですからたまりません。

紙煮は年によって違いますが、33 年は、16 回。大体早朝から。

1 回は、朝 2 時から、3 時からが 6 回、4 時台が 1 回、5 時台 4 回、その他 4 回。火を燃やしている時間は約 3 時間。その他の作業に約 1 時間。

節拾い（紙さわしとも言う）

節拾い場の小屋は、共同で秋に作り、春になると取りこわし、毎年作り替えます。

昭和 34 年には、1 月 5 日節拾いの準備をして、6 日から始め、4 月 23 日まで延べ 84 日間。一日平均 8 時間 44 分になります。

今の竜興寺清水の汲み取り場の上から下までずら一と並んで、寒中手を水の中に入れてっぱなしでの作業。白くなった楮の皮を一本一本たおみながら（たぐりよせながら）、ごみや、節を取り除きます。手が冷たいので、「おぼ」（灰の中に火を入れる入れ物）で手を温めながら、長い長い一日を同じ姿勢で実に根気のいる仕事を世間話をしながらする作業です。

紙はたき

子供のころ共同作業所があって臼が 7 つも 8 つも並んでおり、家から紙さわした原料を桶に入れて、背負って持って行っては、原料をはたいたものです。木の羽根が同じ所でなくまわりながら、トッチントッチンとはたき、時たま攪拌したり、のりを注いで時間を見上げて上げます。

紙すき

昭和 34 年 1 月 14 日からすき始めて、5 月 4 日まで延べ紙すき日数が 86 日間 777 時間になりました。一日平均 9 時間 3 分、すき屋（紙をする小さな部屋）に入って立ち通しの作業。86 日間のうち、夜漉かないで、昼間で切り上げたのが 16 日間だけ。あとは夜食休みもろくろくしないで、夜おそい時は、11 時～11 時半まで。部屋の暖房といえば、火鉢の炭火がたよりだが、炭火じゃ知れたもん。夜になれば段々火の気も細くなる。

こんな火鉢で灰の中で焼いただんごをもらったのも思い出の 1 つです。

朝一番のすき船の中の水は、さぞ冷たいと思います。紙すきは手を水の中に入れてっぱなし。すく時も水のしぶきがとんで来る。しかも部屋が狭く動く範囲も限られ、同じ動作の繰り返し。すいた一枚ずつを重ねた紙床からはたえず水がしたり、水が流れる。以前は節拾いした原料を細かにたたき共同作業所があったのですが、個人の家を設置する様になり、すいている間に臼でつき、すき船に入れて、こぶる（攪拌する）時も機械で、かなり高い音がします。こぶる装置は馬鋏のように何本もの竹が出ており、前後に動いて攪拌するものです。一流の工場並みの作業を一人で行っております。寒中はどうしても時間も少なく、能率も上がりませんが、4 月に入ると殆んど毎日 11 時間労働、そろそろ苗間を作る頃、早く雪を割って消して、庭に苗間を作り、藁を切ったり、堆肥を入れて、まわりを藁であんで、上に土を入れて、サツマイモの仕込み、ナス、キウリ、トマト等の苗作り。殆んど家で野菜苗を作ったもので、父親は紙をすきながら、窓越しに見て、思う様に進まないで世話を焼いたり、しかったり。父にはしかられっ放しでした。

冬の仕事の紙すきが年によって違いますが、この年は、5 月 4 日までかかりました。

紙ほし

トタンの中に水を入れて、薪でわかして、紙を 1 枚ずつ細い棒に巻きつけてはトタンにはり、ハケでサーとふいて、乾いたらはいで次のをはる、繰り返しです。

にれ切り

にれの木を切りに行くのは、決って馬曲山。

33 年 10 月 19 日第 1 回にれ切り（本沢の外）母と 2 人朝 5 時家を出る。雨が降って来た。途中少々小降りとなった程度。大ブナの木に 33.10.19.H と鉋で刻み、むすび食う。三角点を過ぎ、川ずたい上に登り、一ヶ所 13 本その近くで 7 本荷物が出来たので、荷物をまとめて、帰りの準備。帰りの途中ぶどうのあった所で少し日が差し、ここでむすび食う。途中でキノコもあり、雨がひどくなり、3 時 25 分帰宅。家を出てから、10 時間 25 分過ぎ、荷物は 2 人で 13×600 匁あった。

10 月 21 日 2 回目のにれ切り、4 時 5 分家出る。9 時頃むすび 1 つ食う。相当上まで登

り、土砂崩れのひどい所通り抜け、にれなく、途中から藪のひどい細道に入り、下りすぎて道に迷い、道に出たのが 12 時 30 分頃家に着いたのが 5 時半ごろ（約 13 時間 30 分）

10 月 25 日 3 回目のにれ切り

6 人で行き 3 : 30 ~ 4 : 30（13 時間）2 人で 8×500 あり、ナシの木においてくる

11 月 5 日 5 回目にれ切り 3 人で行き、3 : 30 ~ 5 : 00（13 時間 30 分）本沢へ。今迄で最高というくらいの良いもの多くあった。

父、母 2 人で 22×500

今から 56 年前一年に 5 回も馬曲の奥山までにれの木を切りに、父、母が主体で、（父 53 才、母 45 才）一緒（18 才の時）に行った事もありますが、とにかく後をつけて行くのがやっとな。早く休みにならないかとそればかり思っていました。朝は 2 時頃起きて、雨が降っても、予定通り強行。真暗の中、懐中電灯も持たずに、ただひたすら、前の人の後をつけて、すべて歩き、かわらこばについてもまだ暗い、やっとなほんのり明るくなる気配。でもまだ暗いからと言ってゆっくり休んではいけない。あまり長く休むとかえって疲労が出る。山道でも道らしき所を歩くときはまだしも、いよいよ藪の中に入り、遠くから眺めて、にれの木の実を見つけて、一直線に進むときは、藪ひどく、つるあり、木あり、やっとな見つけて切って 2 本や 3 本では背負うわけに行かない。かなり長く切るのも、それを持って次の所まで見つけながら動き廻るには、にれの木が細くとも重過ぎる。まとまってある訳ではなし、お互い離ればなれ。声を掛け合いながらもあまり動くと迷ってしまう。おいて行かれない様に荷物をまとめて、今度は縦に背負って山歩き。これまた大変。道に出るのが必死です。山の仕事は、早目の下山が鉄則です。

子供の頃の思い出は、家にいる留守部隊は午後 2 時か 3 時に、鉄の輪のはまった石ごろ道でもガタガタ進む荷車を、2~3 人でかわらこばまで押し上げて、荷物を持ちに行っただけです。

畑で作る草にれものりが出て、どこの家でも作ったものですが、山奥の重たいにれは、表皮をきれいにはいで、中の白いものだけをうすくけそいで使う。手はかかるが、質が全然違うようです。

にれ切りは危険でもあり、とにかく重労働です。一回行ってくれば 2~3 日は仕事になりません。年令と共に難しくなってくる作業ではありました。残念なことですが今となってはまったく廃れております。

選別、紙そろえ、包装、出荷

家中で苦勞して、皆で作り上げた内山紙ですが、品質も工程中の調整やら、技術等々により、品質にばらつきがあるかも知れません。一枚一枚手に取り、いよいよ選別、紙そろえ。これは根気のいる工程で、肩が張ったり、腰が痛いらしく、父によく肩をはたけと言われたものです。

紙の裁断も幅の広い包丁で、良く切れそうなものを、さらにその都度懇切丁寧に研いで、使います。枚数が多いので、定規の厚い板の上のり、角度も 1 ミリたりともずれない様に、機械で切った様に切るには、相当の熟練した技術が必要です。

包装は 25 帖（1,200 枚）一丸に梱包して出荷する。子供の頃、学校へ行く時バスに乗って、瑞穂の北信内山紙工業共同組合へ小使いがなくなると、背負わされたものです。

以上